

アメリカのNPO魂を探る

マサミ・コバヤシ・ウィーズナー

Assistant Director IMPACT*¹

「北カリフォルニアのリバモア市にウィーズナー基金というのがあるよ、聞いたことがある？」と、ドイツ系の名でわりあい珍しい夫の姓を知るなり、尋ねられることがある。正確にはウィーズナー・シニア基金といい、コミュニティで生きるシニアの交通費を助けるためのファンドで、義母の遺志で創設された。

家族や知り合いが助かっている、と聞くこともあり、そんなときにはどこにでもいるごく普通の専業主婦だった義母フランの、得意げな笑顔とその大きな目の輝きを思い出す。

■ ある主婦の遺志

フランことフランシス・ピアス・ウィーズナーの一生を紹介することで、アメリカにおけるNPO活動の根底にあるNPO魂とでもいうべきものについて、少し語ってみたい。

フランの祖父はスコットランド人でアメリカに渡りそこでアイルランド娘と結婚、生まれた男の子がフランの父、そこにフランス系の母が嫁ぎフランが生まれた。アメリカの白人によくある欧州各国の混血だ。

フランは1910年生まれで、空前の経済大恐慌時代に大学生だった。フランが育った家庭は敬虔なプロテスタントのクリスチャン。節約、勤勉、自律、自助、正直、教育、博愛などが重要な価値とされ日常の規範だった。5人の子どものうち妹2人はナースになり、兄も弟もエンジニアとして大企業に生涯勤務した。当時としてはよくある家庭の様子だったが、学究的なものに興味があり比較的成績の良かったフランは化学専攻、修士を取得した。フランは学生時代知り合った化学研究者のウィーズナー博士と結婚、専業主婦になり、4人の娘を育て、43歳で末の息子(夫)を生んだ。

フランの夫は定年退職直前に亡くなった。幸い、それ

までには家のローン支払いも終わり、多少の蓄えをもとにした株の配当や、勤め先の国立研究所からの恩給もあったので、贅沢をしなければ社会保障年金や配偶者年金など国の福祉に頼る必要はなかった。

過去の納付金の見返りとしての年金ではあっても、いったん公的なお金となればそれを海外旅行やおいしいものを食べるなどの奢侈には使いたくない、本来の公的な理念に沿った目的に使いたいと彼女は考えた。そこで、この年金を毎月そっくり貯金と投資運用に回して別口座に蓄え、それがウィーズナー基金のもとになった。

■ 高齢者の交通手段の確保

彼女自身は老後に経済的な苦勞をしなくてすんだが、地域社会には福祉や慈善事業の恩恵でようやく生きている人も少なくない。80年代半ばの都市郊外のこの一隅に公共交通機関の充実はなく、これは車を持たない、または運転をやめたシニアなどには、大変な経済的負担を強いる落とし穴になっていた。

また交通手段がないことで、地域の行事などへの参加が不可能になり、それが理由で情報やサービスから取り残されることも起こる。そこで、バスやタクシーを使って無料のイベントや各種無料相談サービスを、だれにも遠慮することなく利用できるよう、フランは貯蓄した年金をそれに役立ててほしいと遺書に残したのだ。

フランの多少の資産や税の申告などをしていた会計士の友人が、ボランティアとしてそれを手伝い、銀行も協力して口座を設定したそのときの仮の名「ウィーズナー・シニア基金」が、そのまま正式な名称として残った。

こうして、あるとき現状に心を痛めたある主婦の思いが、この基金の創設に結びついた。



マサミ・コバヤシ・ウィーズナー
Masami Kobayashi Wiesner

カリフォルニア州立大学バークレー校(心理学専攻)卒業、スタンフォード大学大学院(社会心理学専攻)中退。現在はサンフランシスコで通訳者として活躍するほか、「のびる会：新渡米者の会」顧問(元会長)、NPOワークショップシリーズ講師などを務める。近著に『シニアが活かすアメリカのNPO』(現代書館)がある。

そして20年以上にわたり、その基金をもとにした活動が続いている。ここには、アメリカの高齢者が果たした役割の一つの典型があり、同時に彼女の存在感、生きた誇りとその証が垣間見える。

政府主導ではない業務(Non Government Organization=NGO)、地域に根ざした事業(Community Based Organization=CBO)、実利を度外視して主観的な必要性に基づいた活動(Non Profit Organization=NPO)などの価値観がいっぱい詰まったエピソードだ。

■ 草の根のロビー活動

どこにでもいそうなアメリカの平均的な女性で、贅沢を嫌い困った人のために尽そうという優しい気持ちを持ったフランには、また別の一面もある。

彼女は人体に悪影響を及ぼす殺虫剤の空中噴霧や、化学肥料の撒布をやめる運動の引き金になったことがあった。

私の夫がまだ小学生だった頃は、近郊の大規模農業地域や果樹園、ぶどう園用に季節になるとヘリコプターで殺虫剤や肥料が撒かれていた。そういう日は家から出ないようにと事前に時間を指定した通知が回るが、家庭内に避難していたはずの夫にその影響が出た。微熱、湿疹、意識も多少不明確になり、化学の知識があったフランは急いでその化学物質の生成などを調べた。

神経中枢に有毒作用があると知ると、強力な情報啓発に乗り出し、教会や公民館での集会、ピラを作成し近所に配布、市や郡の市制委員などに陳情交渉。ネットや携帯が普及する以前の地域社会で、近所の主婦や学生、引退者たちを動員し、地元選出の議員たちへの草の根ロビー活動を展開した。有毒物質を含有したそれらの化学薬品使用が州法で禁止されるまでの数年、専門知識を持って



フラン(35歳)と夫。3人の子どもたちと

いた背景を生かし一介の主婦ながら議員たちとも深い議論を続け、フランはその追及の手を決して休めなかった。

最初は、フランの過剰な反応を多少恥ずかしくさえ思っていた私の夫も、いよいよ規制が法律化されると、「これで助かった、実は家の娘も撒布があると具合が悪くなって……」「証明もないので届けることもできないでいた」というような声が多く寄せられたことを知り、結果として多くの人を助けることになった母の行動を、とても誇らしく思ったという。

■ どこにでもいる人の思い

リバモア市は、20世紀になって秘密兵器開発の国立研究所の開発で発展した。そこへ勤める科学者の居住地中心の新しい町で、その人口構成はほとんどが教育のある健康な白人家族だった。比較的長寿で持ち家率も高く、離婚率は低く中高年からの伴侶探しも盛んだ。現在も似たような人々が活発に暮らしている。生活にも余裕があり、成人した子どもたちは離れていくが、家族との精神的な信頼度や結束は固い。ある意味では郊外都市の典型といえる。そこに住んだフランは、必要なことがなされていない現状を冷静に客観的に見据えた。気が強くて世話好きで、思い込みが強くて、でも優しくて……。

信じたことを一生懸命主張する、よく見かけるタイプのアメリカ人の主婦であり、決して特別な人ではなかった。

日常の身の回りには必ず小さな不便や不快がある。それを丁寧に見てみると、世の中の矛盾が見えてきたりする。それを見逃さずに解決方法を根気強く探し、そして何より熱心に活動する。だいたいのアメリカ人はまず、苦情の持ち込み先を探し、解決策を見つけるための相談先を探す。それに対処する既存の役所の窓口や協会やボランティア

【*1】

IMPACT: International Medical Program for AIDS Clinical Training
IMPACTは、UCSF(カリフォルニア州立大学サンフランシスコ校)のメディカルセンターが実施しているプログラム。



亡くなる半年前のフラン(72歳)。通っていた教会の牧師さんと



高齢者対象のランチサービス「シニアランチプログラム」の運営を手伝うシニアボランティア

団体や財団がないなら、自らができそうなことを見つけてとにかく動き出す。まずはいっしょに解決策を探していけるような仲間を探す。それもないとなると、1人ででもできることを始める。

だから、リバモア市にフラン・ウィーズナーは何人もいたし、また隣町にも多くのフランがいた。これから先もフランは何人も出てくるだろう。そして何より素晴らしいのは、そうして始められたほんの小さな動きでも、共感する人がいればそれを支えるボランティアがいつのまにか名乗りを上げてくれ、その活動は必要な限り続いていくことだ。

■ 活動の継続性と透明性

ウィーズナー基金の場合は、フランの子どもたちが一度は遺産分けされた電気事業体の株を基金に寄付し、そこから安定した配当金が出ることにより、運営の持続が可能になった。どのように小規模な活動でも、創設の工夫、継続の工夫がなされ、加えて目的に沿って使われたかどうかをモニターしチェックする。そこで設立当初の活動理念(定款)に基づいて軌道修正を要求できるシステムができる。

自然発生的に始められた活動でもそれを継続させるためには、このようなシステムの構築とそれを支えるいくつかの大事な決まり事があり、それらの誠実な遂行と遵守が求められている。

- ① どれほど少額の経費や援助の支払いでも、先に決めておいたルールに基づいて行い、原則例外は認めない。
- ② 例外を認める場合には複数人間が決定。
- ③ 支出決定と実際に支払いをする担当は別の人間にする。
- ④ 予算決算の承認と支払い担当の人間を別にする。

⑤ 信任でお任せにせず、プロセスの公正さと透明性を明確にし、定期的にチェックをする。

いい加減に見えることも多いアメリカ人だが、いったんルール化されたことを誠実に遂行する生真面目さは、日本人もかなわないと思えることがある。

■ 潔さを持った活動

フランがかかわりあったいくつもの非営利活動のうち、実際に「法人組織」体制までになったのは、「ウィーズナー基金」だけだ。なぜならばそれ以外は存続の必要がなかったからだ。草の根運動でも目的が達成されれば、その必要性はなくなり消えていくものが多い。

非営利世界のよさは、小回りが利くことや柔軟性で、政府や営利法人ではできない活動内容や運動を可能にすることにある。無限に拡大していったり、また意義を失っても存在を継続するのでは、社会を助けるどころかかえって負担を増やしていくにすぎないことが、基本的な共通認識だ。

このあたりは日本人には耳の痛い部分かもしれないが、善意や創意工夫で世の中をよくしていこうとする思いを反映するため、地域に根ざしたCBOや中小のNPOの運営は、組織のための存続ではなく、ときの流れや必要性の変化に敏感に対応していくことこそが、その力量なのだ。

桜は季節が過ぎれば思い切りよく散り、また違う季節に合わせて自然の欲するままその日に備える潔さがある。アメリカのNPOの真髄は実は日本の桜の美しさにも通じるのではと、ひそかに思う。